

研究における支援システムの確立

岩永貞昭*

1996年、停年後、ワシントン大（シアトル）での10ヶ月余りの客員を終えて、つくづく思ったことがある。それは我が国における研究支援システムの貧困さであろうか。もとより、こうしたシステムが欧米の足元にも及ばないのは周知のことで、留学された方々はすべて身をもって経験したであろう。言うまでもなく、欧米と日本の文化や考え方には著しい違いがあるので、何事も短絡的に比べるのは控えるべきであるが、客観性のあるサイエンスの中では許されるであろう。

さて、欧米の平均的研究室では、教授、準教授、助教授（docent も含む）など、いわゆるスタッフに加えて、専任秘書のほか技術員、研究補助員、civil engineer の幾人かが、ルーチン化された仕事や機器の管理、運営に当たっている。また、スタッフ専任のテクニシャンもいる。研究を支えるこうしたシステムが、我が国の研究室にあるだろうか。最近の集中豪雨的な予算配分の傘下にある研究室は別として、通常の実験室では、予算的にも、また厳しく規制された雇用の面からも、とても無理であろう。如何にそうしたシステムが貧困であるかを反映する身近な例として、一昔前のことではあるが、我が国における Protein と DNA sequencers の購入状況にみることができよう。詳細（両機種の購入数など）は略すが、驚いたことに、我が国の購入数は Protein と DNA sequencers とともにヨーロッパを越えているし、DNA sequencer は US よりも多い。勿論、当時、販売数が最高であった1社のみと比較なので正確さに欠けるが、後発メーカーからの台数を加えても、Japan > US > Europe の比は変わらないであろう。言いたいことは、もし研究室に欧米並みの確立した支援システムがあって、研究補助員がそうした機器を日常的に動かしていれば、例え protein や DNA の構造情報が必須である今日でも、欧米を越える程の数は必要なだろう。こうした高価な機器は、最近の MASS プームの例を挙げるまでもなく、幾つかのグループで共用するのが欧米では当たり前である。

ここで問題なのは、機器の導入によってそれなりの成果を挙げているのであればまだしも、多くは一時使用したあと、埃を被って放置されたままになることである。私の経験でも、たとえ sequencer が設置されていても、日常稼動していないためにスムーズに動かず、当方にサンプルを依頼される場合も多くあった。従って、これは税金の無駄使いとも言えるし、またそれ以上に虚しいのは、研究補助員が採れないために、補助員で充分できる仕事を研究者が肩代わりをせざるを得ない現状であろう。何も sequencer に限ったことではないが、これほど研究者の能力を無駄使いしている例は余りない。研究者側から見て、こうした状況を生む原因には、①共用することへの認識の貧しさ、②一人占めへのひとりよがり、③新しい機器を導入することへの満足感、④流行を追う焦り、⑤日本人の器用貧乏、などが挙げられようが、これらは反省するとしても、やはりバックアップシステムの貧困さが大きく影響しているように思えてならない。欧米並みの支援システムの確立と制度化は、緊急かつ重要課題であろう。

ところで、官僚機構によるある種の統制が、研究の自由、創造性、自治を犯している点無しとしないが、昨今の大型予算の配分の偏りや、その運用を見るにつけ、かつてのサイエンスに対する公平な support and no control の精神が次第に失われつつあるのが、大変気になる。帰るところ、今日の科学行政のあり方に問題があるが、それにしても上意下達の先取り競争に陥った感の強い現状を、生化学・分子生物学会の皆さんはどうみるのであろうか……。

さらに加えれば、我が国の土壌は、歴史的にみても、独創性を発揮する要素に欠ける。①権威を好む性格、②組織の力をタテにした体制を依りどころとする性質、③本音で討論できず、常にある種の序列をテコに行動する姿勢、④アイデアへのタダ乗り論など、こうした事がなくなる限り、独創性のある研究は生まれない。自由な発想を育てる仕組みと、忌憚ない評価がなし得るアトモスフィアが必要と考える。そのためにも、大学・研究所のタテ割り行政、研究体制をなくし、境界領域を一層育てる努力が必須であろう。

以上は、約10年前、ある重点領域研究のニュースに書かせて頂いた内容を、少々、改変、加筆したものであるが、今日でも、アトモスフィアはさほど大きく変化してないようである。

*財団法人・化学及血清療法研究所・顧問、本会名誉会員